



市指定史跡

おおなづか

大名塚古墳

バス…三重交通バス「山出」より徒歩10分

車…伊勢自動車道津ICから車で15分

大名塚古墳群は、経ヶ峰東麓に位置する標高90mの独立丘陵に築かれた3基からなる古墳群である。3号墳は既に消滅したが、1・2号墳については良好な状態で保存されている。

このうち市の史跡に指定されている1号墳（大名塚古墳）は、直径23m、高さ4mの円墳である。埋葬施設は横穴式石室^{せきしつ}で、外部施設としての葺石^{ふきいし}や埴輪^{はにわ}は確認されていない。

明治36（1903）年に所有者らによって発掘調査が行われ、鏡、石製品、装身具、刀、須恵器^{すえき}などが出土したと伝えられているが、現在その多くは散逸しており、現存するものは一部の須恵器のみである。

石室の現存長は8.95mで、古くから開口しており、本来はもう少し長かったと考えられる。遺体を安置する玄室^{げんしつ}の長さが4.75m、奥壁幅1.9m、高さ2.9m、玄室への通路である羨道^{せんどう}の長さが4.2m、最大幅1.4m、高さ1.7mで、入口に向かってわずかに広がっている。石室の平面形は、玄室と羨道の境の石が両側に張り出していることから両袖式石室^{りょうそでしき}と呼ばれている。

横穴式石室は、朝鮮半島の影響を受け北九州で出現したもので、6世紀には全国に広がる。羨道入口の開閉によって、他の遺体を追葬できる構造になっており、有力者の家族墓となっていた。

安濃川流域にも横穴式石室を持つ古墳が多数築かれたが、大名塚古墳はこれらのうち最大の規模を有するものであるとあって、6世紀後半に築造されたものと考えられる。

（「広報津」平成21年5月1日号）

